映像新聞社様、映像新聞：令和6年12月9日号に当社透明有機ELディスプレイの記事を掲載頂きました。

東和エンジニアリングが披露

企業・文教・公共向け映像システム

TOWAROW PARK FESTIVAL 2024開催

システムインテグレーターの東和エンジニアリングは、内覧会「TOWAROW PARK FESTIVAL 2024」を東京都千代田区にある同名の同社ショールームで開催した。同社は文教や企業、公共施設における音響・映像・通信設備の設計・運用・保守を手掛ける。内覧会では市場別に最新システムやトレンドについて紹介した。

内覧会では、昨今のユーザーニーズを受けて構築した、135型のNEC製LEDディスプレー（サイズ6×1・7㍍、1・5㍉ピッチ）2面から成るワイドディスプレーシステムを披露した。

教育分野ではこれにより、ハイブリッド授業におけるよりリアルな対話が可能となり、企業や公共設備では視認性、一覧性の高さを生かしたシステム監視が実現する。タブレットには制御用のユーザーインタフェースを別途構築しており、それぞれの用途に最適なシステムをトータルで提供できることを訴求した。

ワイドディスプレーのデモ

またプロセッサーには、柔軟な画面レイアウトができるオリジナルの「マルチウィンドウパス」シリーズを利用。建物内ではAV over IPを利用した映像共有もしており、連携による一体感のある空間づくりや、迅速な情報共有のデモを披露した。

法人市場向け展示では「未来の会議室」をテーマに、センサーによるシステムの自動起動や、カメラがマイクの音声に追従する様子を実演。教育市場向けには、BYOD（Bring Your Own Device）による「スマートキャンパス」をテーマとし、リアルな学びをいっそう充実させるための提案をした。

独自開発したクラウドベースの「出席管理システム「Torimass（トリマス）」はこれが初披露。学生は自身のデバイスでQRコードを読み込むことで簡単に出席登録ができる。ICリーダーなどの機器を使う必要がないのでスモールスタートが可能だという。

透過ディスプレー9面を使ったシステム。情報伝達に加え圧迫感のない空間演出ができる

同じく独自開発の「DEIL（デイル）」は、混雑状況を可視化することで施設利用時のストレス軽減を目指す。サイネージやモバイル向けサイトと合わせ、学校の自習スペースや企業の食堂に提案している。

またオープンスペース用として展示した、パナソニック製透過ディスプレー9面システムは、機材による圧迫感を軽減しつつ空間演出を施すことができる。

2022年に設立した大型映像システムのレンタルや設営、運営支援をするグループ会社「KOTO」や、桃栽培・スマート農業に挑戦する「東和AGワークス」、常駐運用支援を展開する「東和オペレーションワークス」の活動も紹介した。

若尾祐史マネージャーに聞く

「システム市場はクラウドとAV over IPが今後のカギ」

東和エンジニアリングの若尾祐史マネージャー（TOWAROW事業推進グループ）に、内覧会および同社が目指すものについて聞いた。

若尾氏

――今回の狙いは。

「ユーザーが実際に体験をして、どのような場面で使えるのかを想定できる環境を作った」

「映像が使われる場所は広がっている。従来の提案は教室や会議室の中にとどまっていたが、その領域を飛び出して、キャンパスやオフィス全体でこんなことができるというトータルでの提案を充実させていく」

――技術的にはどんな要素がキーになるか。

「1つはクラウド。場所に制約されることなく使えるサービスを提供する。もう1つがIP伝送（AV over IP）。ネットワークケーブル1本でAVシステムを構築できるので、映像信号の集約と分配が簡単になる」

――コミュニケーションサービス「towa cocoo（とわここ）」など新しい取り組みの紹介も目立った。

「towa cocoo はシステム納入後、顧客ごとに提供される専用ポータルサイト。システムの操作に困った場合など、すぐにスマートフォンから電話やメールで問い合わせができる。サポート履歴や部屋ごとの取扱説明書もスムーズに確認できるためトラブルを未然に防ぐ」

「顧客と永続的なパートナー関係を築けるように開発した。納入システムの最大限の活用とデータ収集を支援し、次のリプレース（設備更新）へのつながりを作る」

「システムに関する履歴を共有できるので、顧客側で担当者の引き継ぎに活用される例もある。今後、生成AIを活用することでより使利なものに発展させたい」

※映像新聞社様転載許諾済み